

第3回伊賀市学校みらい構想検討委員会 議事概要

開催日時：2024（令和6）年5月14日（火）午後1時30分～

開催場所：伊賀市役所 5階 501会議室

出席委員：水木委員長、土肥副委員長、今岡委員、森永委員、福岡（順）委員、松生委員、村主委員、田中委員、築田委員、上田委員、野口委員、田島委員、今村委員、福岡（光）委員、加納委員

欠席委員：佐々木委員、川北委員、川島委員

事務局：谷口教育長、川部事務局長、東事務局次長、森口教育総務課長、西口学校教育課長、藤岡教育総務課政策係長、藤山教育総務課主任

1. 開会

事務局：定刻となりましたので、ただいまから、第3回伊賀市学校みらい構想検討委員会を始めさせていただきます。4月の人事異動で伊賀市教育委員会事務局長を拝命しました川部と申します。本日の会議の進行を務めさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。担当させていただきます事務局の職員が4月1日の人事異動で変更になりましたのでご報告させていただきます。

（変更職員が自己紹介）

それでは事項に入らせていただく前に、何点かご確認、ご報告をさせていただきます。

初めに会議の公開についてご説明します。本日の会議は、伊賀市審議会等の会議の公開に関する要綱により、会議を公開し、会議の傍聴を認めておりますので、本日の会議を傍聴される方、報道関係者の撮影等について、ご了解、ご理解をお願いいたします。あわせて、会議録作成のための録音と会議録の公開について、ご了解いただきますようよろしくお願いいたします。また、ご発言の際はマイクの使用をお願いします。続いて資料の確認をさせていただきます。

事前に送付させていただきました資料に変更がありましたので、本日、差し替え資料としてお手元に配布させていただいています。差し替えとなりますのが、事項書と資料1、資料3となります。ご迷惑をおかけいたしますがよろしくお願いいたします。改めて本日の資料については事項書に記載のとおりとなります。

《資料確認》

続いて、本日の会議の成立についてご報告させていただきます。「伊賀市学校みらい構想検討委員会設置要綱」第6条第2項に基づき、本日は

佐々木委員、川北委員、川島委員より欠席の連絡をいただいております。18名中、半数以上の15名の委員の皆様の出席をいただいておりますので、会議が成立していますことをご報告させていただきます。

それでは事項書に沿って進めさせていただきます。

1 あいさつ

開会にあたりまして、水木委員長よりご挨拶をお願いします。

委員長：皆さん、改めましてこんにちは。本日はとても天気の良い中で皆さん大変お忙しい午後、ご出席をいただきましてありがとうございます。いよいよ今日の会議からより具体的なこの検討委員会で検討を進めていくべき事項に入ってくると思っています。皆様には是非、遠慮なく感じられたこと、思われたこと、コメントや意見をいただきたいと思いますので、本日もどうぞよろしくお願いいたします。

事務局：ありがとうございました。

それでは、この後は、当検討委員会設置要綱第6条第1項により、委員長が議長を務めるとなっておりますので、以下の進行について、水木委員長にお願いいたします。

2. 議事

(1) 望ましい学校規模、学校配置について

委員長：それでは事項書の「2 議事」に入らせていただきます。

この検討委員会でご協議いただく項目として、「望ましい学校規模、学校配置」「義務教育9年間を見通した学校の体系」「少人数を活かした特色ある学校運営」「地域社会との連携」それと「通学方法と費用負担」の5つとなっています。前回と前々回でそれらの項目に関して、伊賀市の小中学校の現状や義務教育を取り巻く様々な決まり事などについて事務局から説明をしていただきました。今回からは、それぞれの項目について、伊賀市の将来を担う子どもたちの教育環境について、地域の実情なども踏まえた中で協議を進めていきたいと考えています。今回は、「望ましい学校規模、学校配置」について、前回に検討を進めるポイントも紹介いただいておりますので、これまでの資料を参考にご意見をいただきたいと思います。前回、委員会としては資料の追加は具体的にはお願いしませんでした。今回事務局から追加資料を提示していただいておりますので、初めにその説明をお願いします。

《事務局説明》資料１・資料２・資料３

委員長：説明をいただいた資料も参考に今回の協議項目についてご意見をいただきたいと思っています。まず、「望ましい学校規模について」これは、小中学校の各学年の学級をいくつぐらいに設定することが望ましいかということになりますが、前回の議論での１０年先の児童・生徒数の見通しや検討のポイントとしてあげていただいた「教育的な視点」「地域コミュニティの核としての視点」「標準的な学級編制の視点」なども踏まえてご意見をいただきたいと思います。資料２については最新のものとして、資料３で視覚的に地図を用いて参考資料として準備いただいています。より具体的なことを念頭において、１０年後の子どもたちのことを考えてご意見をいただきたいと思います。

委員：小規模の学校には小規模の、大規模の学校には大規模のメリットがあるということも当然わかっていますし、前年までは１５０名ぐらいの中学校でしたが、今年は５００名の中学校に変わりました。その中でいろいろなことを感じています。どちらの学校が良いという意見ではないということ前置きしてお話します。学校運営について考えるとある程度の規模が必要になってくると考えています。一番感じるところは人間関係についてです。クラス替えがあるということは絶対に望ましいことであって、そのために各学年で複数学級あるということが望ましいと思っています。少人数であれば気心も知れて人間関係もメリットがあると思いますが、学年が単学級でクラス替えが無いとなると人間関係が固定しやすくなって、こじれたりしたときに新学年になっても再構築ができない場合には、特に人間関係から登校しにくくなった生徒にとっては、ずっと関係性が変化しないことは本当に大変な状況になると思います。人間関係の鍛錬という意味でも、ある程度の学校規模が必要と思っています。私はこれが重要なポイントと思っています。学校行事に関しては、クラス同士が切磋琢磨して刺激しあう関係性を考えると３クラス以上がいいと私は考えています。昨年度の中学校は各学年２クラスずつの編制でクラス替えはできる状態でしたが体育祭では学年の２クラスで競い合うというスタイルは難しいので全学年の６クラスで競い合うようにしていました。集団づくりが目的ということ踏まえた取り組みでしたので行事を終えた満足感や貴重な学びの場としてありましたが、中学校１年生と３年生が競うとなると体力差が歴然としていたので学年での対応という形が望ましいのではと感じていました。違う中学校では、全学年３から４クラスの規模で体育祭や小コンクールなどは学年対応で行っていましたし、また違う４～５クラスの中学校でも体育祭はクラス対抗だったと思います。合唱コンクールになると同じ

学年での競い合いが一番切磋琢磨し合え、活性化していると思いますし、あまりにも小規模であると合唱活動自体が成り立たない、三部合唱をするなら女子を二つに分けるしかないといった音楽教師の悩みを今も聞くことがあります。学習面についてもある程度の規模がないと弊害があると思っています。学年2クラスの規模で、美術、家庭科は免許外教科担任解消の加配をもらって非常勤の先生が時間講師として週に数時間、学校に来ていただいていた。技術科も他校との兼務で週1日勤務をしていただいていたが美術科、家庭科、技術科は週に1回ぐらい先生が来ますが、そのほかの曜日は質問したい状況にあっても教科の先生がいないので生徒が質問できないといった不都合があったように思います。2クラスの中学校では教科の教師については教科担任が1名だと回らないので複数名いるだけで恵まれていると思いますが、単学級の学校では教科担任が1人ずつしかいない中で、教職員も年々若くなっているという実態もあり、大変な状況だと思います。各学年5クラスずつある中学校では、数学担当で6名、英語担当でも6名の教師がいますので教職員同士の切磋琢磨とか教職員の育成の環境も随分違うと感じました。働き方改革の面で見ると学校規模の大小に関わらず同じだけの校務分掌があるので小規模の学校ほど教職員1人にかかってくる校務分掌の負担は大きいと感じます。規模が小さい学校ではその分教師個人の力量によって学校経営が左右されることが多分にあるように思いますし、なかなか分掌の適正化が難しいと感じます。教職員の定数上や各教員の持ち時間数、配置から考えると4学級以上が一番望ましいと私は思います。部活動については、地域移行が進んでいく中で解消されるところもあると思いますが、小規模であると設置部活数が限られるので、この競技がやりたいという生徒の願いが叶わない場合が実際にありました。校区外通学をしてでも競技をやりたいという思いを持った生徒は、ハードルは高いが保護者が大きな負担を抱えながら校区外通学で部活動をすることもありました。校区外通学までいかなくても他校の部活動に参加させてもらえないかとの要望も実際に聞かせていただきました。大規模の学校になるとたくさんの部活動が設置されていて学びの機会が保証できるのではと思いましたのでお伝えします。

委員長：具体的に学校現場での経験を踏まえた話で議論いただくのに大変参考になります。今の話で人間関係についてはクラス替えがあったほうがいい、行事の面、学習の面、教職員の方の働き方改革の面、部活動の面からも話をいただきました。なりよりも学びの機会を考えた上で、子どもの10年後を考えた時に具体的にある程度の規模が必要で4学級という具体的なことをあげていただきました。

委員：小学校の現状について話をさせていただきます。今回臨むにあたって校長会で小学校の校長先生に小さな学校の様子を聞かせてもらいました。適

正規模のことで一番の課題がクラス替えでした。クラス替えができる規模が必要という声がほとんどの小規模の学校でありました。次に多かったのは登下校です。集団登下校をしています、特に下校に際しては終業時間が低学年と高学年とでは違います。学年で下校しますが小規模になるとひとつの在所に一人とか二人しか子どもがいないので最後は一人や二人で歩く距離が長くなることについて、安全面の部分ですごく心配で、保護者の方からもそういった声をいただくと聞かせてもらいました。集団で登下校する通学団が成り立たない状況があり、心配しているということでした。その他は、授業の面では小規模校は少人数できめ細やかな学習ができる部分は、加配をいただいてもなくてもそうだけれども、逆に多人数での例えば体育の球技とか表現活動とかは人数が足りないので、できないままに卒業してしまうことがあると聞かせてもらいました。音楽の合唱が難しいことや校務分掌については重なるので省略しますが、そういったことが小学校の校長先生からご意見がありましたので発表させていただきます。

委員長：小学校の現場から具体的なことで登下校について安全に直結することで心配もあることや学習の面も少人数ではかなわない部分もあることをご紹介いただきました。中学校や小学校の現場から貴重な意見をあげていただきました。

委員：望ましい学校規模は、いくつぐらいかという話ですが、それに関わって参考になるかどうか、旧青山町の今日までの歴史を言わせていただきます。40年前の博要小学校が今は青山小学校となっています。学校の統廃合は、最初は博要、高尾、矢持、上津、阿保の小学校ありましたが、小規模校が3校だったので話し合いの中で複式を解消していくべきという形で動いてきました。話の中では青山町で一つにするプランがありましたが保護者や、地域の人にとっても、学校が自治として中心となって生活圏という形で動いていたのですぐに一つに統合するのではなく、とりあえず3校を統合しようということで博要小学校と高尾小学校、矢持小学校が矢生小学校となりました。その時にバス通学になり、子どもたちの健康的な面などの課題も見えましたが改善という形で学校が動いていきました。この時点で阿保小学校、矢生小学校、上津小学校になり、その後、矢生小学校、上津小学校が阿保小学校に、阿保小学校は名前が変わって青山小学校の1校になり、そういう流れで長い期間でやってきました。今の青山小学校はどの学年も2クラスで小規模校の良さを活かしながら子どもたちは生活しています。バス通学については一番青山小学校から遠いのは、高尾、メナードのある古田ですが1時間以内で通学しています。

委員長：実際に経験されたことで時間をかけながら地域のことを考えていくことでその対応も必要というお話で、理想とする学校規模としてある程度規模があるほうが望ましいのではとか、その根拠となるようなこととしてクラ

ス替えができた方がいいのではといった意見をいただいたところです。

委員：規模に関して中学校は4クラスぐらいという話でしたが、小学校について校長から聞いた中では2クラスから3クラスが適正ではないかという意見を聞かせていただきました。

委員長：中学校は4学級ぐらい、もしくはそれ以上あるような学校が望ましい、小学校は2クラスから3クラスが望ましいといった意見に対していかがでしょうか。

委員：クラス替えがある学級数というのがその通りだと思います。先ほどの青山の話で長い期間かかって青山小学校が複数12クラスでここまで何とか維持できましたが、10年たったらこれができなくなるというスピード感に伊賀市がどう対応していくのか、そこが一番の課題だと思いました。人間関係については、小学校の場合は、複数の保育園、幼稚園から大きな小学校は集まってきます。郡部の方はその数も少ない中で場合によっては一つの保育所や保育園から小学校、そのまま中学校、10数年ほぼ変わらない地域と最近は保護者から子どものことを考えてどこか親戚の家に仮に預けて行かすとか、規模感によっては学校の将来像でここよりはあっちとか、保護者が選んで本来の学校に行かないとなればその子どもは減ってしまい、反対にこちらは増えますといったアンバランスも出てくる可能性もあります。本当にスピード感を出していかないとこれまでギリギリ保っていたものが10年たてばさらに課題が出る、それをどうするかということを考えていかなければならないと思います。

事務局：教育委員会としては長い期間をかけることは考えていません。今の現実の子どもたちの状況を見て、できるだけ早く対応をしていきたいと思っています。全国的に子どもが減ってくる中でそれぞれの市や町の考え方によって様々な対応をしていることは事実です。子どもは減るけれども学校は今の状況を保つという市や町もあります。当然、子どもが減るから何とかしていこうという市町もありますし、伊賀市もそういうことを考えています。地域から合併してほしいとか、何とかしてほしいと言ってきて初めてそこで動きましようという市町もあります。市や町の状況や子どもの人数も違いがあるので一概にどうしていくことがいいのかはそれぞれの市や町の考え方だと思っています。ただ伊賀市としては、今の状況を何とかして改善していきたい、部活にしても実際に違う校区に行きたいという声も出てきています。そんな状況の中できちっと子どもたちの学習を保障することは当然しなければならない、それと一番大事なことは小中ともクラス替えができるような人間関係の改善を図りたい、そういったことを何とかしていきたい、市としてここで皆さんから意見をいただきたいと思っています。ここでは、どこの学校をどうしていこうといった話にはなりませんが、皆さんからいただいた基本的なコンセプトを基に、早く再編計画を作

っていきたいと思っています。そのための会議ですので皆さんから理想を言っていただければと思っています。ただ、いろいろな条件もありますのでそのとおりになるかどうかは別の話になりますが、子どもたちにとって一番いい学習環境をできるだけ早く提示していきたいと考えていますので皆さんからご意見をいただければと思っています。

委員長：基本的なコンセプト、基本的な考え方をここでしっかりと、そういう意味でも適正な理由も上げていただいているので参考にしながら進めていきたいと思います。2つ目の項目もありますので、後でご意見がありましたら遠慮なくお願いします。

次に「望ましい学校配置について」に関してご意見をいただきたいと思っています。これは、伊賀市内の学校の位置になります。こちら、ポイントとして「通学距離・通学時間の視点」「地理的な状況や地域社会との連携の視点」をあげていただいているのですが、これに加えて、これまでは伊賀市合併前の旧市町村の枠組みを変えずに学区を設定してきましたが、今後、この枠組みを超えた柔軟な学区の可能性も踏まえてご意見をいただきたいと思います。

委員：先ほど理想的な規模感は中学校4クラス、小学校は2から3クラスという話を伺ったが、学校が大型化する分には一保護者としてもいいことと思うが必然的に通学距離と通学時間が増える子どもがいるという部分で、その現実をどうやって納得していただくか、と思います。その問題がクリアになれば、地域の住民の方にも受け入れてもらいやすいのではと思っています。住んでいる地域で再編成されることによってデメリットを被るようなことはなるべく避けていただいたうえで再編案を作成してほしいという希望はあります。

委員長：具体的なデメリットとして何かありますか。

委員：例えば柘植から西柘植小学校へ通うとなると遠くでは1時間ぐらいはかかると思いますが、小学1年生、2年生、3年生ぐらいの子どもが1時間歩いてとなりまちの小学校まで通うというイメージができなく、自転車もまだ小学3年生でも車が危ないことがあります。そうするとスクールバスとなって税金を投入しないといけないという部分で、個人的な意見として保護者が何割か負担するような形でスクールバスの運営をしてもらった方が安心と思いますが、それに反対される保護者もみえるのでどう調整するかが非常に難しいと思うことと、どこから乗るか、柘植中の子どもをすべて乗せて回ると相当の時間もかかるし、そのあたりの細かい運営の仕方が非常に大事になると個人的には思います。

委員：以前は分校というのがあって、1年生2年生は体力のことがあるので分校を残してそこで1、2年生が学び、少し体力がついた3年生からは他の地域の子どもたちと一緒に人数も多くなる形の中で学んでいく、先生は分

校も本校の先生も一つの学校の先生で以前にやっていた地域もあります。今は伊賀市ではありませんが、それぞれの地域に学校は地域の拠点として残しつつ、そこを活用しつつ、もうひとつ大きな学校枠が考えられるかどうかは、何かいいアイデアがあれば小学校については、そこは解消できるのではと思います。中学校については自転車も含めていろいろとタイプがあるので約1時間かかっても、ただしそうなるとクラブが終わってから帰るのでクラブの時間をどう圧縮するか、その兼ね合いになってくると思います。

委員長：配置のことを考える上では、通学の方法も心配だと思います。具体的にどこの学校とどこの学校を一緒にするといったケースをあげて議論することはこの場ではできませんが、小さい子どもがどんどん通学距離が延びることや他のところでもスクールバスの問題がでてくるというのが共通の課題になると思います。スクールバスについて、保護者からいくらかの負担はどうなのかといった話がありましたが、なかなか調整が必要になってくると思います。安全で安心して小さな子どもも通える方法としてスクールバスのバス停なども含めて運営のあり方も検討が必要と思われます。旧市町村の枠組みについてのご意見はいかがでしょうか。

委員：旧の市町村が合併しても学校は一つの生活圏で動いていたので、例えば旧青山町では、1小学校、1中学校、これはそれぞれの旧市町村の望むところであると思います。特に大山田、阿山にしても、ゆくゆくいがまちにしても、島ヶ原でも1小1中が難しくなってくると、どこかと統合しなければならないとなったらどうクリアするのか。自治協も廃校などを使ってやっていきたいという形で動いている地域もあります。枠組みを切り崩していくときにどうすみ分けをするのか、その話し合いが本当に持てるのか、この場を離れた話し合いになると思います。個人的な意見は、どこかと組むように思えるが、本当に現実的になるのかと思います。旧上野市であれば1つにならないので大丈夫と思うが、大山田、阿山、青山にしても今後、10年先にどこかと統合というのは保護者としてはホッとすることと思うがその時の話し合いが大変であると思います。

委員：教育委員会に伺いますが、再編をするうえで既存の施設を使う流れなのか、それとも全くゼロベースで新しく学校を建てるのか、どう想定をしているのか教えてください。

事務局：具体的にはまだ考えていません。これまでは合併特例債やいろいろな予算があったので新しく建てたことが多かったのですが状況によっては既存の施設を使わざるを得ない、どこかに寄せていくことになると思っています。既存の施設を使うことによって周りの地域の方、人口の多い地域の方が歩いてあるいは自転車で来られることが多いので、遠くの方はバスになります。中途半端に途中となるとみんなバスになりますので結果的に

通にくいとか、地域から離れてしまうとか、これまでの課題もありましたので、できたら既存の施設でという思いは持っています。これからご意見をいただく状況ですので具体的にどうしていくのかというところまでは考えていません。

委員：少ないよりも子どもがいた方がダイナミックに教育していけると思っています。小学校が2クラスになってクラス替えがある学校は理想だと思いますが、10年後を見てみるとそんなことができる学校がほとんどないので2クラス学級に合わせて学校をつくればすごく少ない学校の数になるので心配と思います。スクールバスで通っているので子どもの姿がなかなか見えない、普段の夕方とか、バスで行ってバスで帰ってくるので、地域の方は子どもの姿が見えないので寂しいとか、子どもを感じられないことをすごく言ってくれています。自治協も子ども対象の行事をしてくれませんが、子どもが地元で愛着を持つことが少ないのか、あまり集まらないので、これ以上学校が少なくなって遠いところに通うことが心配であると地域も思っています。全体として子どもの数が減るのは確かなことなので手を打たないといけないことはわかるのですが、2学級にこだわりすぎると本当に学校の数が少なくなってしまうことがすごく心配しています。

委員長：10年後のことを考えると、なるべくスピード感を持って、子どもの未来の学びを考えながら、その適正に近づけるという考え方をベースに進めていくことが必要というように感じました。

委員：学校規模については、現場の先生が言われるとおりだと思います。学校配置の話になった時に資料の小学校3キロ、中学校5キロの地図を見ると円が重なっているところ、3つ重なっているところがあります。特に市街地はそうなっていますが、これだけを見ていると、ここであれば1つでもいいのではといった見方もできなくはないと思いました。今ある学校を頭において議論するとなかなか委員長が言っているところまでいかないので、今あることを横において答申を出すことなのかと思っています。もし、今ある学校を想定するともっと時間をかけた議論が必要で、今ある議論はいかに児童生徒の教育条件をよりよくするとはいえ、地域住民の思いであるとか、支援も大事な教育条件の一つと思うので、これ抜きでは考えられないのですが、未来、10年先、子どもたちを守っていくのはこうだというような意見でいいのかということが自分の中で疑問となっていることです。

委員長：地図の資料もありますがこれにとらわれすぎると10年先を考えてということが、どうしても現状の学校のことになってしまいますので、今後の議論の進め方として事務局から意見があればと思いますが。

委員：子どもたちの教育環境を考えていくという意味での統廃合で旧の上野も含めて校区再編をやってきたわけです。いろいろと考えて、ここに線を引

いて次からこうですよということを地域の皆さんに納得してもらうのに教育委員会も含めてかなり頭を下げて話をし、時間をかけてやっとここへ落ち着いたと思います。子どもの先のことを考えて、ゼロベースにして考えた時には、こんな青写真がありますとするのか、そうではなくこれを基にして効率よく納得できるものを作っていくのか、その方向は決まっていないと思いますが、その両方を考えないといけないと頭に浮かびました。一つの小学校を統合していくについても、候補地や通学距離、バス通学など、案ができてからいかに納得してもらうかということに時間がかかるとと思いますが、そういった意味では早いうちに何かの原案を出さないといけないのではと思いました。

委員長：事務局から基本的な考え方のところでもあるので意見があればお願いします。

事務局：校区の再編というか、学校をどこにするか、どうしていくか、これは非常に地域との関わりが大きいので大きな問題と思っています。20年以上前の当時の上野市の校区再編で説明会に何度も行って、やっとその再編計画が完成できたのが昨年でした。随分いろいろな声をいただいて進めてきました。最終的には地域の中で子どもたちが減ってきたことで、集めないといけないことが地域の人にも理解していただきましたが、最終的に残ったのは通学の問題でした。バスで子どもたちが通学するわけですが、どこにバスを走らせて、どういうふうにしていくのかということが最終の課題でした。そのことでまとまらず、統合には賛成だけでもバスのことで条件をいただいたりもしました。最終的には地域の方に理解をいただいて今の再編はできている状況です。例えば、大山田についても遠くから通ってもらい今の現状になっていますが10年後になりますと中学校も小学校も1クラスずつ、それもそんなに多くない数で1クラスずつになっていくので、それを現状として残していくのか、その学校はどこにするかは別として他と一緒にしていくのか、この区域を越えてということになると思います。また、青山の学校の位置は残すけれども旧の上野のところから通うことも可能になることは、旧の枠を超えてということになります。枠を超えなければ旧の青山だけで小中学校、大山田だけで小中学校となりますが、そうなればクラス替えもできなくなりますし、現状のままということとなってしまいます。現実にも早く他の学校と一緒にになりたいというご意見をいただいている地域もありますし、反対の意見もあります。子どもたちにとって一番いい条件は何か、いい教育として伊賀市としてどうしていくのか、伊賀市の教育の課題を克服していくのはどういう姿なのか、考えなければいけないと思っています。ある意味、どこと、どこをとといったことではなく、こういったことがいいのではといったことは話していただいてもいいと思いますが、こういった方針で行くのかを作ってください、

理想の形を出していただきたいと思います。理想といっても今現実に学校があって、まちの中は子どもたちが多いので、どうしてもそこに学校が多くなってしまったりとかは、当然のこととなるので、全く離して考えることは難しい状況と思っています。現実に島ヶ原の小中学校は、子どもたちの数も少ないですし、どうしていくのかとか、他と一緒にするのかとか、いやいや地域の方々が残すとか、なかなか難しい話になると思います。理想的なご意見を出していただきながら現実の中でまったく離れて考えることではないと思います。今回求めているのはこういったことがいいのではないかという基本的なところをいただいて、それを次の具体的なものにつなげていきたいと思っていますので、小学校で何学級、中学校で何学級以上がいいということであれば、それをしようとすると自動的にどうなっていくかというのは地域の中で残すというよりは地域を超えていくということではないかと感じています。今回いただくのは基本的な考え方をいただきたいと思います。

委員長：一番ベースとなるところの考え方なので重要なところだと思います。このままで行った時の課題をあげた上で理想通りにいけばいいと思いますが、現実を見た時のこともあると思いますので望ましい形に現実の考えないといけない課題を考えて、基本的なコンセプトに基づいたところをできるだけ多くの意見をいただきながら進めていきたいと思っています。事項の方も小規模校のあり方に少し移していきながら意見をいただきたいと思います。まとめて今日の規模や配置も含めて伺いたいと思います。

委員：いろいろ意見を聞かせていただいて、皆さんのおっしゃる通りでそうだなと思いながら聞かせていただいています。小規模校を残すことも多分でてくるし、そうせざるを得ないこともあると思うので、その時は手厚いサポートが教育の方でしていただけたらと思います。集団で何かしようとかドッチボールをしようとか、バレーの試合をやってみようとなった時に、学年ではできないとなるのでそのあたりが寂しいという気がしますが、それを地域との繋がりや別の違うことをしながら大規模校ではできない経験をさせてあげたら子どもたちにとっていい経験になると思います。

委員長：地域との繋がりとか地域特性を活かした学校づくりといったところで、伊賀市のこの地域での小規模校の意義ということも見いだせるのではといったご意見だったと思います。歴史的や、地理的なことの地域特性の上で小規模校に対しての意見はどうでしょうか。

委員：昔の話になりますが、例えば小規模校の3つの小学校が一緒になって運動会を迎えたりとか、学校間同士の繋がりがあったのは、小規模校が存続していたからで、そこでの工夫ややらなければならぬことを職員で話し合ってきました。それからどこも複式がありましたので渡りという授業、例え

ば3年生と4年生の授業の1時間の中で教師が渡ってみていく、そういった授業の研修も当時はやっていました。今はそこまでの小規模校はありませんが本当に人数が少なかった時には、そういった研修を職員がやっていて、子どもたちへの手厚い授業はその時に考えていかなければならないことと思います。ただ、将来的なことは小規模校のメリットの方よりデメリットの方が多いことで、解消するとなったら過去の授業の経験だと思います。将来的なことを考えると、理想はクラス替えもでき、子ども同士多様性や意見を出し合ったりすることがメリットとして大きいのではと思います。統合になった時に保護者はそちらの方が多かったが、保護者によっては地域を大事にしている思いも聞かせてもらった。一人でも子どもがいたら学校はなくさない、その子がいなくなれば仕方がないが一人でもいたらという強い思いの人もありました。小規模校のあり方としてどう乗り切っていくのか、これは大変だと思っています。今日の文科省の資料で休校した学校の再開というのがありますが、今まで伊賀市教育委員会でこういったことはなかったと思いますが、今後このことも考えていくということで資料に載せているのでしょうか。

事務局：この資料はあくまで文部科学省が出している資料の要旨としてご紹介させていただいたもので、書いている内容のすべてが今後伊賀市教育委員会で取り組んでいくものではございません。従いまして最後に記載している休校の学校の再開については、現在で休校となっている学校はありません。

委員：高尾小学校は休校であったのでは。

事務局：高尾小学校も今は廃止となっています。これまで比自岐小学校が休校となっていました。令和5年4月の上野南小学校の再編により廃止となり、今、休校となっているところはありません。資料は、あくまで文科省が出している資料の要旨ということでご理解いただきたいと思います。

委員：小規模校の位置づけは、小学校の場合では標準的な規模12から18クラスよりも少ない学級で9から11クラスで半数以上の学年でクラス替えができる、あるいは全学年でクラス替えができない、いやいやクラス替えができない6学級より少ない規模とするのか、そのサイズとこれだけは小規模になっても避けるような学校づくりをしていくのか、その目安として考える必要があるのではと思いました。

事務局：特段に小規模ということは決めてはいませんが、小規模で残すとなると小学校であれば6クラス、各学年1クラス以下になるのではと思いますし、中学校では3クラス以下になろうかと思います。名張市で小規模で残したことがありましたが、特認校として区域を決めずに市全体からその学校に行けることで、小さい学校のメリット、大きい学校でなじめなかった子どもが小さい学校のメリットを活かしたところに行けるようにし、小規模として残すのか、いやいや市全体で一定の規模をそろえるのかということで

あったと思います。名張市の場合、最終的には無くしてある程度の学校にしたということがありますので伊賀市として残すのがいいのかということとを議論していただければと思っています。

委員：他の中学校の校長先生から聞かせてもらった話を言わせていただきますが、小規模校の良さについては、きめ細かく指導が行き届き、生徒のつまずきに気づきやすいところで学習面のフォローができるところが良さと思っていますし、自分が昨年度まで勤めていた学校においても学校行事などでは縦割りを組んで3年生がリーダーとして前に立ちいろいろなことを進めていく中では、大きな学校ではなかなか経験のできないリーダーとしての行事の経験は小さい学校の方が経験していると思います。また、学校全体として学校の仲間づくりの感覚を持って進められるのも小規模校のメリット、魅力だと思います。授業の中では主体的、対話的、深い学びを目指して、対話を中心にした授業の展開をやっていますが、小規模になると日頃から生徒同士の関係が密であることもあるので対話的な授業も日常的に行っていると単学級の学校の先生からも聞かせていただいています。発言も習慣化しているところが非常にメリットであることを感じました。

委員長：今日は非常に難しいテーマであったと思いますが検討委員会でも重要となる、コアとなるテーマとして進めてきました。学校の規模、配置、小規模校のあり方についていろいろとご意見をいただきました。全体を通してでも構いませんのでご意見などをお願いします。

委員：結局は文部科学省が出している児童生徒の教育条件をより良くすることを中心に考えていかないといけないと思っています。地域コミュニティの意見を聞くことももちろん大事ですが、そもそも子どもが少なくなる以前に過疎化が進んでいて人間自体が少なく、どうしても密度を考えた配置をしないといけないので人口分布を考えた施策というか配置を考えないといけないと思います。近所の自治会でも大人も少なくなってしまうと児童福祉会を解散しますというまちもあり、大人も子供と同様にいろいろな成り手がなくなる世の中になってきていますので寄せていくしか仕方がないのではと、もちろん小規模校の良さもあると思いますので、先ほどからの話を聞いていて、分校というのがあって、分校を低学年にして本校を高学年にしたらうまくいくのではと思ったりしています。低学年は分校なので体力がなくても徒歩で通って、高学年になっていろいろな集団生活を学ぶ段階になったところで本校に寄せて教育をすとか、本校からのスクールバスは、分校まで出してそこからは徒歩で帰りなさいとすとか、もしかしてできたりしないのかということを考えていました。もちろんバスを走らせるということで市の負担が増えると思いますが、先生の数も減ると思います。ただ先生の給料は県から出ているので県からその分のお金をも

られないのかと、要は削減をしたのだからその分として何かみてくれないのかと県の教育委員会に言えないのだろうか少し思っています。これからこういった建設的な議論が進んでいくことを望んでいます。

委員：自分自身が小規模校を経験したことがなく、小学校も中学校も4クラス以上が当たり前の環境で育ってきて、もちろんデメリットもありましたが4クラス以上の方がメリットの方が多かったと思います。過疎化が進んでいる中で統廃合はすごくいいとは思いますが、そうなるとどこにしようかというようなことは私自身は言えませんが、一人の親として言えるのがクラスが多くなって、1クラスではなくクラス替えができる環境に子どもがもしそうなるのであればスクールバスとかで距離が長くなったとしても、それが子どもの未来にとって良くなっていくのであれば統廃合は良いと思います。時代で子どもが減っていますので私たちが時代に合わせていかないといけないと日々思っているので、統廃合で3クラス、4クラス以上は良いと感じています。

委員：これまでの話を聞いていて、少ない人数よりはという考えを持っていて、何がいいかというと現場の先生もそう思っていると思いました。教師の確保自体も結構難しい時代になってきているのではと、働く人が減ってきている、教師が減ってきていることもあって、そういったことがいろいろなことに絡んでくるのではと心配しています。小規模でいくことで先生はいろいろな学校に、たくさん配置しないといけないのか、分校であれば校長先生が跨いであることができるかもわかりませんが、保育園でも配置基準がありますので学校の先生にもあるのではと思っています。先生の負担が大きくなって教師離れによって成り手がなくなるとか、クラブ活動についても外部団体への委託をしないといけないとか、先生の働き方改革で見直されてきた部分もあって難しいと思っています。何がいいのか、過去の郡部とかを考えていたら、郡部の分は残して、旧の上野市内は統合ができるのではと、地図を見ているとそう思ってしまいました。伊賀市は東西南北が広いので全体を見ながら進めていかないと難しいと感じたところです。

委員：生徒数、児童数、学級数の現状を見ると今、8人とか11人と書かれているところが10年後には3人とか4人とか、家族よりも少ない人数になってくる中で、どこと一緒に統合していくのかとか、その場合スクールバスもどこまでなら行けるのかとか、自転車通学も遠くなってしまうと子どもの負担にもなるし、自転車通学でなかったら保護者の負担にもなってくるという中で、子ども自体も少なくなっている中で、すごく大きな課題がまだまだいっぱいあるとさらに思いました。

委員：学校規模をなんとかするのにクラスをどうするか、言っている意味はわかりますがあまりそのことに拘ってしまうと私はだめだと思います。何クラスでないとだめだとか、子どもの課題は一人一人違うのでクラス替えが

あったほうがうまくいく場合もあるし、なかった方がいい場合もあります。人が多ければいい人もいますし、少ない方が合うといった人もいます。特色のある学校というのは、子どもに選択の幅を広げてあげることと私は思います。コミュニティは、私の住んでいるところは、小学校が4校ありましたが、いまだにちょっとずつ考え方が違います。簡単に数十年たって一つになれるものではありません。子どものトラブルのことを考えるとお互いのことをよく知らないことが原因だと思っています。エリアが広がって子どもが学校へ行って帰ってくるだけで、帰ったら自分のクラスの子と遊ぶ関係もない、限られた空間の中だけしか他の子を理解する時間が無くなると、それが本当に課題解決になるのかと心配しています。あまり杓子定規に決めていくと、どこかで歪みが出た時に責任があるのかと思うと一抹の不安があります。

副委員：皆さんのそれぞれの意見を聞かせていただいて、本当にその通りだと受け取らせていただきました。特に考えているのが最初に基本に戻れということと言わせていただいたと思いますが、伊賀市の教育大綱の中に一人ひとりが輝くこと、一人ひとりが心豊かで健やかに成長すること、未来を創造すること、もっと具体的に言うと、確かな学力の向上を目指せと、2点目は人権同和教育を充実するのだ、3点目はキャリア教育の推進に取り組むのだ、この三本柱にするのだと書いています。つまり今の学校のそれぞれの体制で確かな学力を確保しているのか、心配になってきます。1クラス5人、10年後に3人、それで確かな学力を保證できるのかというところをきちっと抑えていかないといけないと思います。要するにスピード感が大事であって、10年後を考えないといけない、今ここで今のクラス数を考えても仕方がないので10年後のクラス数を基本にしないといけない。中学校は4クラスというと10年後には19クラスですので10校の中が5校でいい、小学校は2、3クラスという話でもし2クラスとすると18校の学校が10校でいいことになる、それが理想か、理想でないかは別にして私たちが諮問された中の課題を解決していくためには、まずは理想を語らないといけないと思っています。理想を語って、一旦ぐちゃぐちゃにして求め直すことも、それも一つの案ではと、10年後私たちが全く理解できない社会が間違いなく訪れるのです。その中で生きていく子どもたちを教育するためにはどうするのか、地域のいろいろな考え方があって、地域のメリットもあって、地域の方が本当に今学校に入って、コミュニティスクールといった形でバックアップしていただいているのが非常によくわかるのですが、10年後にどういう社会が訪れていて、どういう子どもたちの力が必要になることをベースにまず考えていただきたいと感じてしまいました。皆さんが出していただいたご意見は本当にごもっともな意見です。通学の問題も大変だと思います。保護者との関係も大変に

なってくると思いますが、まず学力をどうやってつけるのか、キャリア教育をどうやっていくのか、そのこのところをきちんと考えていただいたらと、それがベースで議論が進んでいけばいいのではと私は今回思わせていただきました。

委員長：皆様から現状を踏まえた様々なご意見をいただきました。10年後を考えた理想もあり、望むべきことはありますが検討委員会では基本的な考え方をベースにおいて子どもたちにとって本当に必要なことになると思っています。今日いただいた貴重なご意見をまとめつつ、今後も進めていければと思っています。それでは議事については一旦終了とさせていただいて、事務局が次回の検討委員会の予定について説明をお願いします。

3. その他 第4回伊賀市学校みらい構想検討委員会

《事務局説明》資料4

— 日程調整 —

＊第4回開催日時：2024（令和6）年7月2日（火）13時30分～

事務局：第1回、第2回と伊賀市の小中学校の現状や義務教育を取り巻く様々な決まり事を踏まえて、本日皆様方に望ましい学校規模、学校配置、小規模校のあり方についてご意見をいただきました。次回は、今後の伊賀市の小中学校について地域の実情を踏まえ子どもたちの教育環境について、どうしていけばよいか、先ほど資料4で提案させていただいた第4回目の「義務教育9年間を見通した学校の体系」、「少人数を活かした特色のある学校運営」、「地域社会との連携」を議事項目として議論を深めていただきたいと思います。今後議論をより深めていただくために、何か追加に資料が必要であればお願いしたいと思いますが今の時点で何かございますか。お気づきの点などありましたらお申し出ください。

《特になし》

委員長：本日は長時間にわたりありがとうございました。進行を事務局にお返しします。

閉 会

事務局：水木委員長様、大変お疲れ様でした。皆様も活発なご審議いただき、あ

りがとうございました。閉会にあたり谷口教育長から挨拶をさせていただきます。

教育長：委員長様や皆様からいろいろご意見をいただき、ありがとうございました。伊賀市も面積が広く、人口が減ってくるという大きな課題があり、今もバスで通わないといけない、バスを通ったら学校から帰っても友達がいない、今も歩いて通っているところも子供が減ってくると、地域にも子どもがいない、昔みたいに地域で遊ぶということができないので学校でそういった時間をとったりすることも含めていろいろなことを考えていかないといけないという状況です。そのような状況で何とか早く改善をしたいと考えていますし、市全体の人口が減る中でどうしていくか、地域のコミュニティをどうしていくかということも大きな課題となっている中で、今回、皆さんから貴重なご意見をいただきありがとうございました。

教師の確保は難しいのではといったご質問をいただきましたが、大変難しくなっています。これは伊賀市に限ったことではなく、全国的にそういった状況であって、国から定数としての教師の数をもらいますが、その数の確保ができない市町村もあります。伊賀市、名張市は、現在確保はできていますがその状況は非常に厳しくなってきました。学校の再編をすることによってある程度解決できる状況になろうかと思っています。教職員は、県費負担教職員といいまして、県の雇用で、市で雇用しているわけではなく、県の所属になります。市の学校に勤務しているので、管理としましては市の教育委員会で管理しているという複雑な状況になりますが、学級数を減らすことによって県費の教職員の数が減ります、市町村の学校の運営費もいらなくなります、市町村は通学バス代がいるようになります。ほとんど市町村にはそのメリットがないということで、国には何度も言っていますが市町村にメリットをいただきたいといった話もしているところです。県がしてくれるのは、合併する学校の合併前1年間、合併後の1年間について、一人だけ教職員を配置をしてくれることです。そんな中でも子どもたちの環境を考えるとどうしていくのがいいのか、理想としてどうしていくのがいいのかご意見をいただきたいと思いますし、県には学校規模が大きくなったから手薄になるのではなく、大きくなっても教職員の加配の配置をしてほしいということは求めています。現時点でも小学校の5、6年生は教科専門も進んでいますし、さまざまな支援が必要な子どもたちへの加配ももらっていますので、いろいろな面での教職員の働き方を考えて、子どもたちに有効な人材をいただくことは大変昔よりはいただいている状況ですので、今後も市から県に求めていきたいと考えています。大きくなったら手薄になって細かなところに目が届かないではなく、目が届くようにしていきたいと思っていますし、県にも引き続き要望して

いきたいと思っています。

今後、地域のあり方とかいろいろな面で皆さんからご意見をいただきながら11月には中間案としてまとめ、パブリックコメントで地域の方々からのご意見をいただき、様々なご意見があると思いますが、ここで出していただいたご心配な点とかもいただきながら、子どもたちにとってはこういった方がいいというものを説明させていただきたいと考えていますので、今後も様々なご意見を沢山いただきますようよろしくお願いいたします。今日は貴重な意見をいただき、大変うれしく思っています。ありがとうございました。

事務局：それでは本日の検討委員会はこれをもちまして終了させていただきます。

午後3時50分終了